

<b>Title</b>	現代青年の社会不安意識と宗教的態度に関する構造分析
<b>Author(s)</b>	丸山, 久美子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 2: 129-147
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=1115">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=1115</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 現代青年の社会不安意識と宗教的態度に関する構造分析

丸 山 久美子

## A Structural Approach to Social Anxiety and Religious Attitudes of Japanese Youth

Kumiko MARUYAMA

Presented here are results obtained from an analysis of social anxiety among Japanese male and female college students, medical students, nursing students, theological students and Buddhist students. The questionnaire method was used to determine attitudes toward the increasing population of the old, international conflict, increased divorce rate, deficit spending, etc.

Responses to individual questions were subjected to Hayashi's Quantification III (Pattern Analysis). Anxiety related to religious attitudes revealed some characteristics which would seem to be peculiar to youth in modern Japan. These characteristics and their background are discussed from the viewpoint of psycho-analytical considerations.

### はじめに

現代は文明の爛熟期である。様々の角度から考えて、これからの日本は国際化、高齢化、成熟化の3本の柱を中心に据えて、物事にあたらなければならないといわれている。

高齢化や成熟化はいずれにしても、文明の老化現象をあらわすもので、もはやこれ以上の新しい発見やそれに伴う感動、驚ろきを与えるような現象はそうめったには起らないということを意味する。

さらに又、国際化時代というのは、世界中が相互に調和と連帯という思想の下に仲良く平和に生きようということが前提となっていて、他国と競争しながら、自国だけ未来に向かって独立独歩の精神で前進する力強いエネルギーのおさえられた時代を象徴している。先進文明諸国の各々が内から

**Key words;** Religious faith, International conflict, Youth delinquency, Hayashi's Quantification III, Psycho-analysis, Neurotic anxiety

湧き出る情熱を喪失し、各々の肉体的機能のおとろえと同時に、他者との共存をはからなければ生きてはゆけないような状況下におかれているわけである。

現在の新産業革命は19世紀以降の第1次、第2次、第3次産業革命とは異なり、人々に喜びや感動を実感させてくれるような技術や製品の開発はみあたらず、その意味において人々に幸福感を与えてはくれない。画期的な大技術ではなく小技術の時代であるといわれる所以である。

Freud (1930) は文化の発達とは人間の幸福を保証するものではないという。人間の価値判断は無条件に彼らの幸福願望に支配されている。いかなる栄華栄達の道を歩いても、本人が幸福であると感じない限り、それは不毛の荒野を歩いているにも等しい。文化が発達し、人々の生活が豊かになればなるほど、人の心はいやされず憂いがいや増す。Freud の精神分析理論は何よりもまず社会心理学的分野の諸問題から派生した様々の現象の分析であり理論である。Freud は神経症者個人の心理の研究から出発して、後にそこで得た理論を宗教現象や文化現象などに適用したものと一般に思われているが、それは逆であって、彼はまず、集団心理現象をもとにして、神経症者個人の心理の解明にあたったものとみられている。「神経症の原因は社会がその文化理想達成のためにわれわれに課する欲望断念の量に耐えきれなくなることにあるとわかった以上、それらの文化的要求をとりぞくか、または大巾に引き下げれば、失われた幸福可能性も戻ってくるのではないか」と結論づけた Freud の見解はさながら現代文明の中で、様々の病理をかかえ乍ら、不安にひしがれて、明日の方向を失った現代青年の姿を予見しているとみることが出来る。

ところで、現代は又第3次宗教ブームであるといわれている。21世紀の日本の状況予測(1988の読売新聞世論調査)によれば、「宗教を信じる人が現在よりも多くなっているか、少なくなっているか」という質問に対して、多くなっていると回答した人が37%、現在と同じが37%と同率、のこりの16%が少なくなっていると回答した。

これを属性別にみると青年層では43%の人が多くなっていると回答し、1969年度調査の結果における17%に比較して25%も増加している。さらに、男性よりも女性が、学歴が高くなればなるほど宗教に対する関心の度合いが高くなるといった結果が得られている。

近代日本の「宗教ブーム」の背景をとらえてみると第1次は幕末から明治維新にかけて、仏教、神道、キリスト教などの既成宗教に抗して、天理教、黒住教、金光教などの民衆宗教が起り、現在でも大規模に活動している。

第2次は第二次世界大戦前後から敗戦後に生じた「神々のラッシュ」に象徴されているもので、霊友会、立正佼成会、PL教団、生長の家、世界救世教、創価学会などをあげることが出来る。これらの新興宗教は現在巨大化して教勢を拡大し、活発に活動をつづけている。

この2つの宗教ブームの共通項はいずれもそれまでの価値観や生活様式が新しい社会潮流の波にのって激動する時代的転換期に勃発したものであるということである。

現在の第3次宗教ブームとよばれているものは前記の2つにみられるような徹底的な社会変革が行われるような時代背景に生れたものではない。いわゆる宗教回帰ともよばれるような静かな流れが人々の心に宗教的行動をひきおこしているのだといえる。その原因を作ったのが文明の爛熟期に芽生えた行きどまり感と不安感に根ざすものと考えれば、第3次宗教ブームがそれまでの宗教ブームに比較して、人間の心情にこもる複雑でやっかいな「内的不安」をかかえての人間存在の根源にまでさかのぼる哲学的・形而上学的課題を多く抱えているといわれる所以である。それ故にこれらの宗教はこれまでの伝統教団や巨大化した新興宗教団体が失ってしまった原初的宗教エネルギーを求めていることは確かのようなのである。つまり、無意識の層（原始心像）の中にねむっていた非日常的超常的現象に対する関心が強められ、霊能力、超能力などの合理的な知性を否定した特異な世界観が宗教の中に取り入れられるわけである。

若年層の占いブームをひきおこしている要素もこの事実を裏づけている。様々の社会不安や内的混乱などの精神的悩みをひきうけてくれる宗教団体に青年が心ひかれる事情もおのずと理解される。

現代の青年の社会不安意識の強さと宗教的憧憬や宗教回帰現象との間にどのような関係があり、今後どのように発展してゆくのかを探ってみれば、めまぐるしく変動する多様な価値感や生き方の方向づけの傾向を少しでも把握することが出来るかもしれない。

以下の研究は現代青年の社会不安と宗教的行動、宗教への態度一般との関係を同世代の男女大学生、看護学生、医学生、仏教学僧、キリスト教（カトリック・プロテスタント）神学生について調査した結果の分析と考察である。

## 調査の方法

調査対象者：日本人の男女大学生（男子265人、女子240人、東京都内、及び近郊のミッション系の大学に所属する大学生）、看護学生90人、医学生（男女混）104人、仏教学僧130人、カトリック・プロテスタントキリスト教神学生63人

調査方法：各学生に生活意識調査票を渡し逐次回収する。

調査日時：1987年9月～1989年4月

調査項目：社会不安の調査項目（高齢人口比率の増大、資源・食料不足、不況・失業・倒産、国際間の利害対立、世界人口の激増、エゴイズムの増大・世代間の断絶、青少年の非行化、離婚の増加、国家の財政赤字の増大、健康・医療制度問題、受験競争の激化、家庭内暴力の頻発）、宗教に関する調査項目（宗教の有無、宗教行動、宗教的態度、運勢判断）、その他、自殺の動機、人生の生き方。

## 結果と考察

まず、各集団を a：一般の男子大学生，b：一般の女子大学生，c：看護学生，d：医学生，e：仏教学僧，f：カトリック・プロテスタントキリスト教神学生とする。この6集団についての宗教的行動や社会不安意識について詳細に比較分析してゆくことにしよう。Table 1 は各集団毎に4つの人生のうち、どの生き方をとるかを調べたものである。この4つの生き方は人々が様々の社会不安と混沌の中であって先の見通しも立たず、希望を失った社会にあると仮定した場合、どちらの生き方を選ぶかという問いによって選ばれた生き方の比率を示している。一般的に青年の生き方志向は革命か、さもなくば道徳的頹廃か（この場合は無節生な性的欲望の満足と自殺クラブ入会、反逆的享楽主義文学やポルノグラフィへの惑溺 etc），さらに宗教熱にうかされるといった3つのうちのどれかに集中するのが定例ではあるが、日本人の青年はむしろ、成りゆきにゆだねて何もしないという結果が相対的に多い。仏教学僧は革命と成り行き志向が半々に分かれている。仏教学僧にとっては神（仏）に祈る行為とは何もしないで成りゆきにゆだねることであり、それこそ仏の胸に無条件に委ねることを意味しているのかもしれない。とすれば、日本の青年の大半は仏教的宗教行

Table 1. Choice of 「Way of living」

Way of living \ Group	a	b	c	d	e	f
1. 快 楽 志 向	19	14	13	14	12	0
2. 革 命 志 向	38	30	38	29	38	29
3. 宗 教 志 向	7	12	11	12	12	59
4. 成 り 行 き 志 向	33	44	38	45	38	8
不 明	3	1	0	0	1	5

（註）表中の数字は比率（四捨五入）をあらわす。全集団の総数は892人

a：一般男子大学生，Male College Students N=265

b：一般女子大学生，Female College Students N=240

c：看護学生，Nursing Students N=90

d：医学生，Medical Students N=104

e：仏教学僧，Buddhist Students N=130

f：キリスト教（カトリック・プロテスタント）神学生 N=63

Theology Students

Table 2. 宗教の有無 Religious faith

Response Item \ Group	a	b	c	d	e	f
有 yes	18	27	22	24	100	100
無 no	82	72	78	76	0	0

為に全てをゆだね、そこに唯一の救いをみつけ出しているのだということも出来る。医学生はことにこの生き方を選択している。神学生は圧倒的に宗教的志向を選ぶ。ここに、キリスト教と仏教のちがいがはっきりと出てみるとみることも出来る。Table 2 は宗教の有無を調べたものである。仏教学僧、神学生を除いた青年層の8割～7割は無宗教である。このような結果は米国の青年と全く正反対の結果を示すものである。ある特定の宗教を信じているかどうかは日本人の場合、特別に意識されてはいないにもかかわらず、日常習慣化されている宗教的行動、たとえば、Table 3 にみられるように初詣、法事、などに出かける率は高い。

仏教学僧とキリスト教神学生との間で差の出ているものは、お守り、おふだの所持の項目である。学僧はお守りやおふだをたえず所持し、神学生は所持しない。もし、この場合お守りやおふだが十字架などの religious charm (お守り)、又は talisman の所持として問いかねばもう少し異なった回答となったかもしれない。これらの結果について興味深いのは医学生にこの種のお守りの所持が多いことである。又、仏教学僧と神学生における回答の差の大きいものは、日の出や日没時に神々しい気分を誘われる、いわば自然崇拜の念と山川草木に魂がやどっていると感じられるいわばアニミズムに関する項目である。仏教学僧はアニミズムに神学生は自然崇拜に回答が多くみられるという結果でこれは興味深い。Table 4 は宗教についての3つの意見について、各々の意見の賛否の度合を調べたものである。まず、宗教にはいろいろなものがあるが、各々は立場がちがうだけで、結局は1つのことを説いているとする意見である。仏教もキリスト教もその他多くの宗教においても、本質的には同じ精神、信条(魂の救済とでもいうべきか)のもとに説かれており、仏教の教典やキリスト教の聖書は究極のところでは同じ主旨である、とする意見である。この意見の反対者は神学生である。仏教学僧は他の人々に比較すれば反対度数が多いとしても全体からみれば賛成の意見の方に傾いている。ある特定の宗教を持たない人々は、どんな宗教、宗派であってもその教説はおしなべて同じであるのだから、どの宗教を信じようと一向に構わないとする態度を示している。仏教学僧も相対的に一般の人々と同様の意見に傾いているとするならば、日本人の宗教的態度として、仏教的信条が最も適合するというべきであろう。

Table 3. Percent of items on religious behavior 宗教的行動の諸相

宗 教 行 動	a	b	c	d	e	f
1. 初詣, 法事, 聖日礼拝	58	67	73	66	85	73
2. 祈 り, 読 経	18	34	27	18	90	92
3. 聖書, 経典を読む	19	27	18	10	91	98
4. お 守 り の 所 持	32	40	35	48	52	13
5. 自然崇拜(日の出, 日没)	41	50	41	29	62	78
6. アニミズム(山川草木の魂)	57	62	56	44	77	54

次に、神仏を信じるのは弱さのあらわれであるという意見については、神学生が圧倒的に反対しているが、賛否の比較でみると、その他全ての人々も同様にこの意見については反対している。又、どんなに科学が進んでも、人間は信仰がなければ幸せになれないとする意見については神学生、仏教学生が賛成するのに対して、他の人々は皆、反対の意見である。但し、何ともいえないとする中立の意見が最も多い。相対的に中立の項目に多くの人々の意見が集まるのは日本人の国民性のしからしむところといえなくもない。とすれば、キリスト教神学生の反応の様相は日本人のそれから最も遠く、欧米諸国の反応と酷似していることになる。事実その通りの結果をあらわしているといえる。

Table 5 は様々の運勢判断を今年1年の内に行ったことがあるかどうか調べたものである。星占は女性に最も好まれているようである。この種の運勢判断は最近、流行しており多くの婦人雑誌や週刊誌に、その解説や方法などがのっているのをみかける。1986年1月の毎日新聞の調査でも20代では2人に1人は占を信じ、しかも、20代前半は60%、後半は47%と大差があり、さらに男子26%に対し女子40%で女性の方が占を信ずる率は高い。20代前半の青年層、ことに女性層が不安定な精神的な悩みを抱えやすく、それを占や新興宗教に支えをみい出すきわめて世紀末的な状況下におか

Table 4. Religious attitude

宗教的態度	尺度	a	b	c	d	e	f
1. 宗教にはいろいろあり、それぞれ立場がちがうが、結局は一つのことを説いている	賛成	44	53	44	50	45	16
	中立	37	32	40	33	22	19
	反対	19	17	16	18	34	64
2. 神仏を信じるのは、弱さのあらわれだ	賛成	27	21	17	22	17	11
	中立	40	34	37	37	16	10
	反対	32	45	45	41	67	88
3. どんなに科学が進んでも、人間は信仰がなければ幸せになれない	賛成	22	23	13	18	64	88
	中立	38	45	44	49	27	3
	反対	40	31	42	34	8	8

Table 5. Some kinds of prediction techniques for fate

運 勢 判 断	a	b	c	d	e	f
1. 手 相	6	20	19	9	15	6
2. 易, 占, おみくじ	39	62	52	47	45	6
3. トランプ, カード占	18	52	37	16	19	5
4. 星 占	35	76	78	37	24	6
5. 夢 占	3	15	10	6	3	2

現代青年の社会不安意識と宗教的態度に関する構造分析

れているのが理解出来る。神学生を除く他の多くの青年たちはこの種の運勢判断を信ずるか否かに関わらず、それらをこの1年間に行ったことがあると回答している。

Table 6 - a は12項目に分けられた社会問題についての不安の程度を示したものである。安心出来る項目は全く皆無で、全ての問題に不安感を示していることが分る。

Table 6-a The anxiety of current social problems

items	尺度	a	b	c	d	e	f
Increasing population ratio of the old A 老年人口比率の増大	不安	76	83	89	90	81	72
	中間	12	9	3	9	12	13
	安心	12	9	8	2	6	16
Energy, resources and food shortages B 資源, 食糧不足	不安	86	85	84	84	84	86
	中間	6	6	9	12	8	6
	安心	7	9	7	4	9	9
Depression, bankruptcy unemployment C 不況, 失業, 倒産	不安	77	74	71	68	70	77
	中間	13	15	20	20	19	13
	安心	10	11	9	12	1	10
International conflict D 国際間の利害対立	不安	77	61	86	77	78	70
	中間	14	23	12	17	12	14
	安心	9	19	1	6	10	16
Rapid increase of world population E 世界人口の激増	不安	74	78	65	64	69	54
	中間	16	15	24	30	18	22
	安心	11	8	11	6	14	24
Increased egoism, generation gap F エゴイズムの増大, 世代間の断絶	不安	56	57	53	64	61	72
	中間	30	24	31	26	29	19
	安心	15	18	14	11	10	9
Youth delinquency G 青少年の非行化	不安	46	59	49	52	56	66
	中間	31	23	30	32	25	22
	安心	24	18	21	16	20	11
Increased divorce rate H 離婚の増加	不安	41	52	48	39	43	72
	中間	30	27	27	40	38	13
	安心	29	21	25	21	20	16
Increased deficit spending I 国家の財政赤字の増大	不安	54	49	46	51	55	56
	中間	28	36	38	34	35	25
	安心	18	16	15	16	10	19
Health and medical problem J 健康, 医療制度問題	不安	54	56	78	57	60	66
	中間	24	25	14	27	25	19
	安心	21	20	8	16	15	15
Keep competition in entrance to school K 受験競争の激化	不安	58	67	60	43	38	73
	中間	19	19	20	35	16	16
	安心	23	14	20	23	25	12
Family violence L 家庭内暴力の頻発	不安	50	59	54	43	59	76
	中間	23	23	27	37	23	18
	安心	26	19	19	22	19	6



現代青年の社会不安意識と宗教的態度に関する構造分析

Table 6 - b は不安の強度を集団毎に平均値で示したものであるが、それによると神学生が最も不安が高く、つづいて女性（女子大学生、看護学生）の不安感が高い。Kierkegaard (1844) は「不安は恐怖やそれに類似した諸概念のようにある特定のものに結びついた概念ではなく、むしろ、不安は可能性のための可能性としての自由の現実性である。そのために、動物においては不安は見出されない。それはまさに動物がその自然性において、精神としては規定されていないからである」として「女性は男性よりもより多くの不安を持っている」「それは女性がより感性的であって、しかも本質的には男性と同じように精神的に規定されていることによる」と言う。現代の矛盾に満ちたきわめて錯綜した文明の爛熟期にある社会状況の中で、時代の変化を微妙に察知し、かつきわめて多感な青年は、合理的知性だけではわり切れないものの存在を肯定し、内的世界への強い欲求を持ち始める。自己の新しい価値観の発見のために、その導入部としての不安感が青年の内なる無意識を刺激する。

Table 6-b Average values of anxiety degree over groups

items	a	b	c	d	e	f
不 安	62.4	65.0	65.3	61.0	62.8	70.0
中 間	20.6	19.8	21.5	26.1	23.1	16.4
安 心	17.0	15.2	13.2	12.9	14.1	13.6

Table 6-c Percent of anxiety degree over groups and items

items	a	b	c	d	e	f	全体
A	76	83	89	90	81	72	81.8
B	86	85	84	84	84	86	84.8
C	77	74	71	68	70	77	72.8
D	77	61	86	77	78	70	74.8
E	74	78	65	64	69	54	67.3
F	56	57	53	64	61	72	60.5
G	46	59	49	52	56	66	54.7
H	41	52	48	39	43	72	49.2
I	54	49	46	51	55	56	51.8
J	54	56	78	57	60	66	61.8
K	58	67	60	43	38	73	56.5
L	50	59	54	43	59	76	56.8
項目平均	62.4	65.0	65.3	61.0	62.8	70.0	64.4

Table 6 - c は項目毎に不安の度合を示したものであるが、それによると全集団、全項目の平均不安率64.4よりも大きい不安率を示した項目は 1.資源・食料不足, 2.高齢人口比率の増大, 3.国際間の利害対立, 4.不況・失業・倒産, 5.世界人口の激増の5項目である。どの集団においても、これらの5項目のうちのどれか1つが第1位の不安率を示している。

Table 6 - d は各集団の不安の順位の間関係の度合を示した順位相関係数表である。それによると神学生集団を除く他の集団間に有意な関係がみられる。それらを類別すると男子大学生、医学生、学僧と女子大学生、看護学生が比較的類似の関係にある。これは関係集団毎の差というよりは男女差が不安の内容に効いているものと判断される。又、医学生、看護学生が学僧のそれと類似であることは興味深い。どの集団においても相関の低い神学生集団の不安をひきおこす社会問題の内容の順位を一位から順次みてゆくと 1.資源・食料不足, 2.不況・失業・倒産, 3.家庭内暴力, 4.受験競争の激化, 5.高齢人口の増大, エゴイズムの増大・世代間断絶, 離婚の増加となるが、この結果は3位以下に大巾な相違を示している。神学生は老人問題は親子関係や家族の絆, 親子共存の危機意識に結びつけてそれを心配しているのに対し、他の集団は国際間の利害対立や世界人口の激増など食料事情に結びつく危機感が多いという結果によるものと思われる。ちなみに、最も不安の少ない社会問題が神学生を除く他の5集団では全て離婚の増加であるのに対して神学生にとって、最も不安の少ない社会問題は世界人口の激増である。

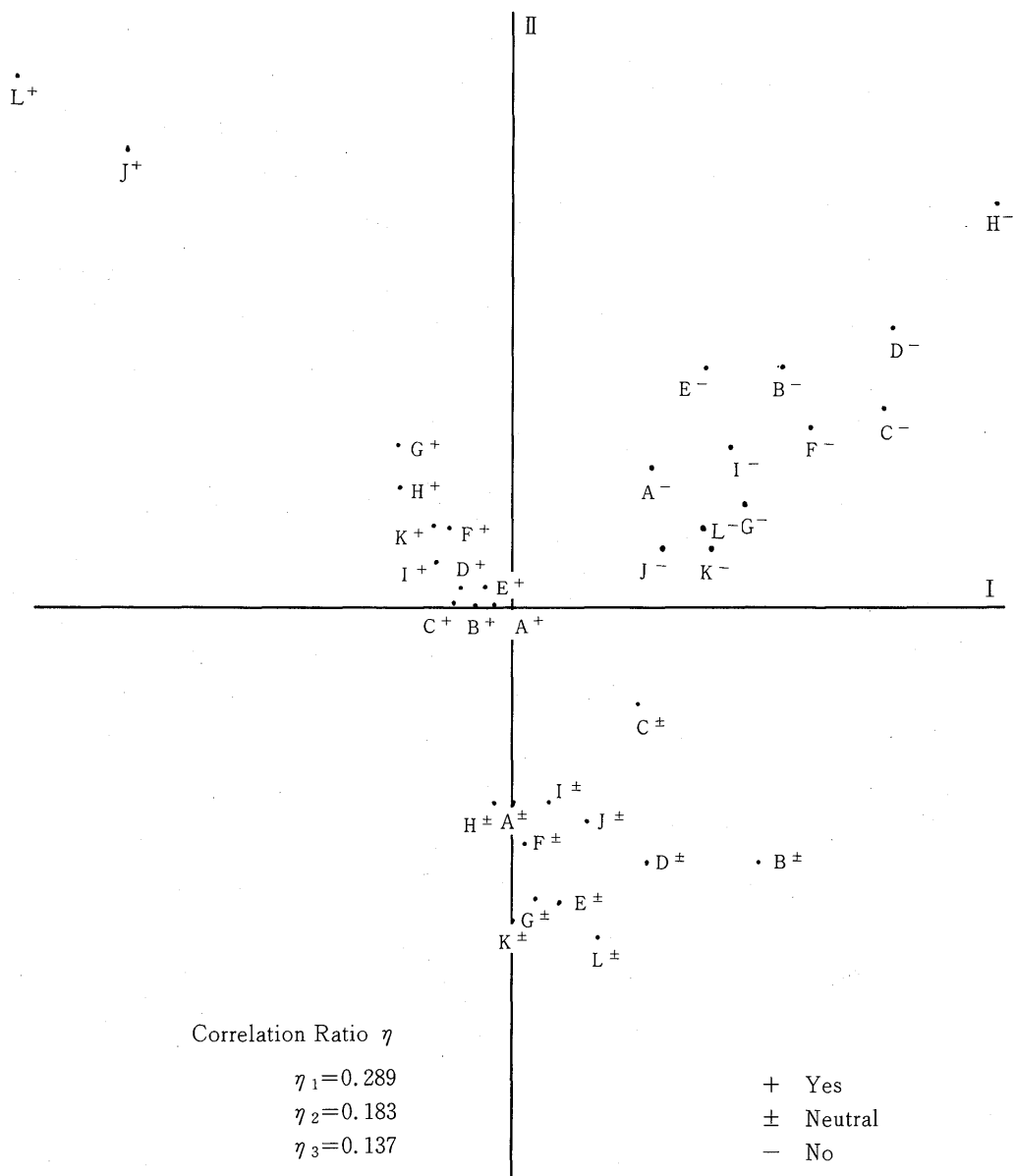
このような不安項目についての不安の強度をもとにして、各集団毎にいかなる構造が存在するかを林の数量化Ⅲのパターン分析を用いて抽出してみることにしよう。

Fig. 1 ~ 6 までの空間布置図は各集団の12項目×3カテゴリ（+不安, ±中間, -安心）の36項目を2次元の空間に位置づけたものである。各アイテム・カテゴリ（+, ±, -のサインのついた項目）が同じカテゴリ同士でまとまっている場合に、この回答は安定した構造をもっていると考えられる。又、この安定の程度を示す相関比  $\eta$  (correlation Ratio) の値が各次元（軸）毎に算出されているが、( $\eta_1$ はⅠ軸の相関比,  $\eta_2$ はⅡ軸の相関比,  $\eta_3$ はⅢ軸の相関比をあらわす),

Table 6-d Rank Order Correlation of each groups

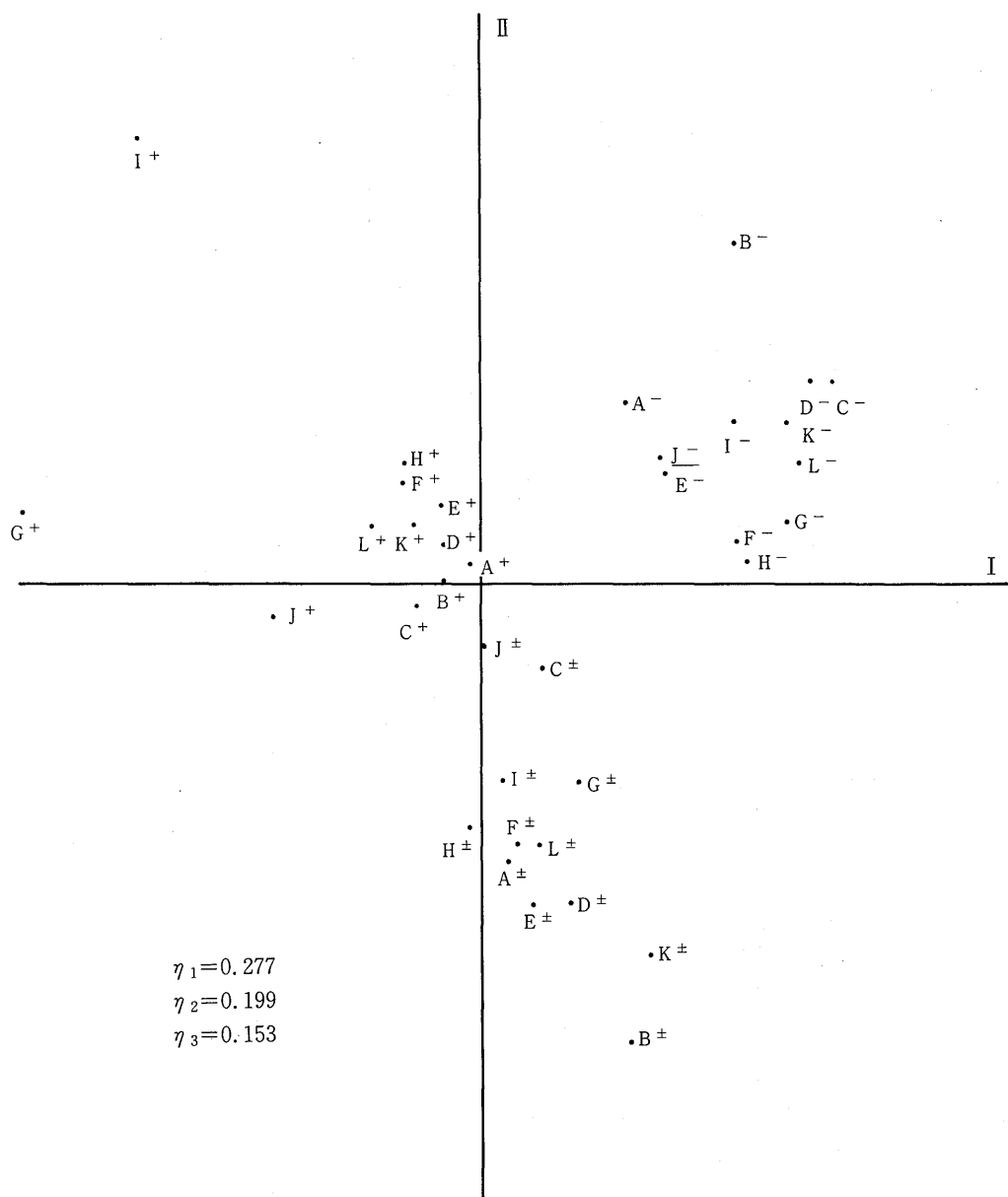
	a	b	c	d	e	f
a						
b	.724					
c	.770	.759				
d	.840	.703	.794			
e	.791	.700	.818	.962		
f	.280	.407	.252	.194	.242	

Fig.1 Two dimensional configuration of items regarding Axes I and II of Quantification III  
(Male college students)



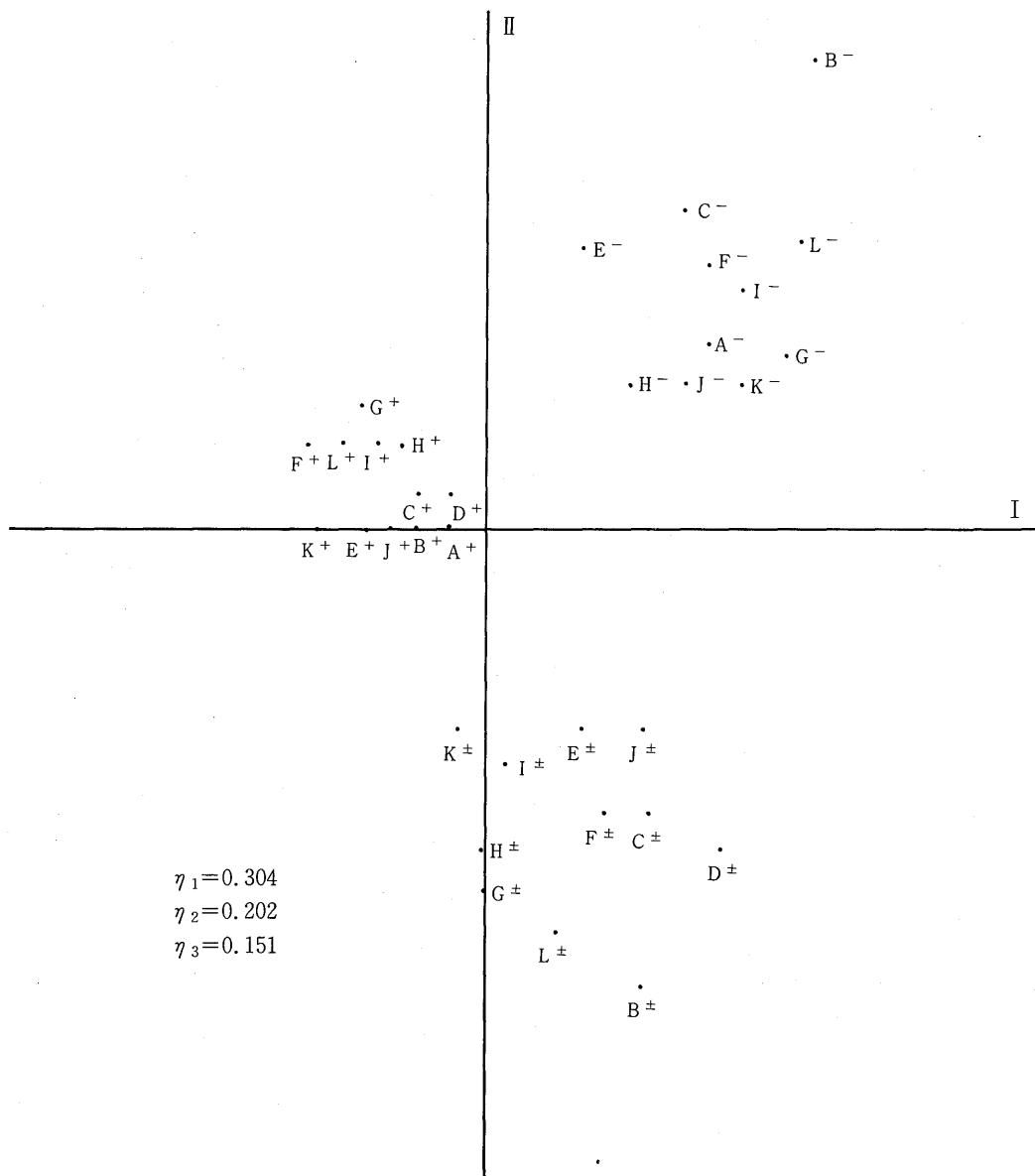
それによると第Ⅰ軸、第Ⅱ軸ともに最も安定している布置図を描いているのは、Fig. 6 の神学生の回答構造であり、又、最も不安定と思われるのは Fig. 1 と 2 の男女大学生の回答構造であるこ

Fig.2 Two dimensional configuration of items regarding Axes I and II of Quantification III  
(Female college students)



とがわかる。安定した回答構造を描くということは、社会問題に対する不安意識がはっきりしており、それは、ほとんど固まった不動のものであるということを意味する。即ち、神学生、医学生、

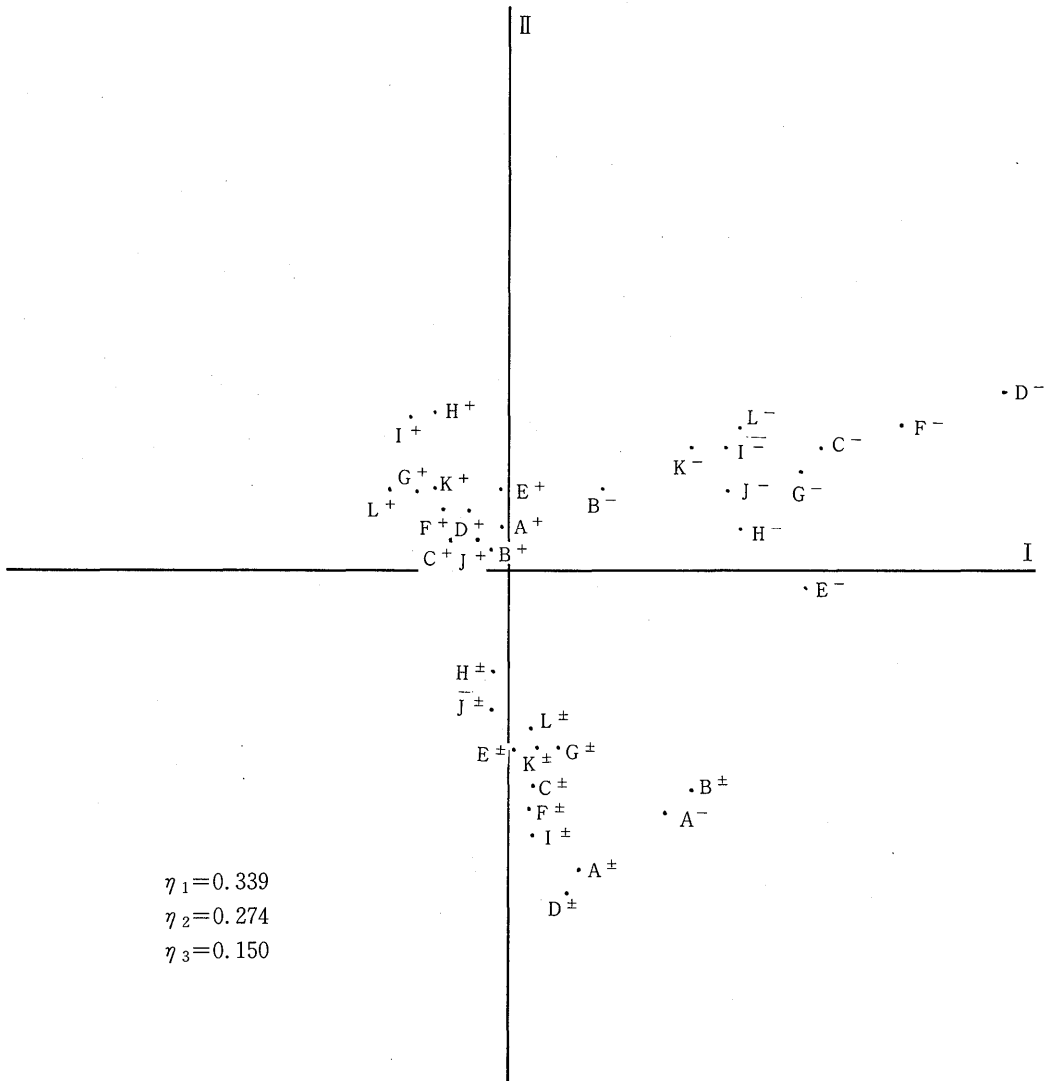
Fig.3 Two dimensional configuration of items regarding Axes I and II of Quantification III  
(Nursing students)



学僧の社会不安意識にはみだれがなく、回答誤差が少なく、その回答の信頼性は高いといえる。

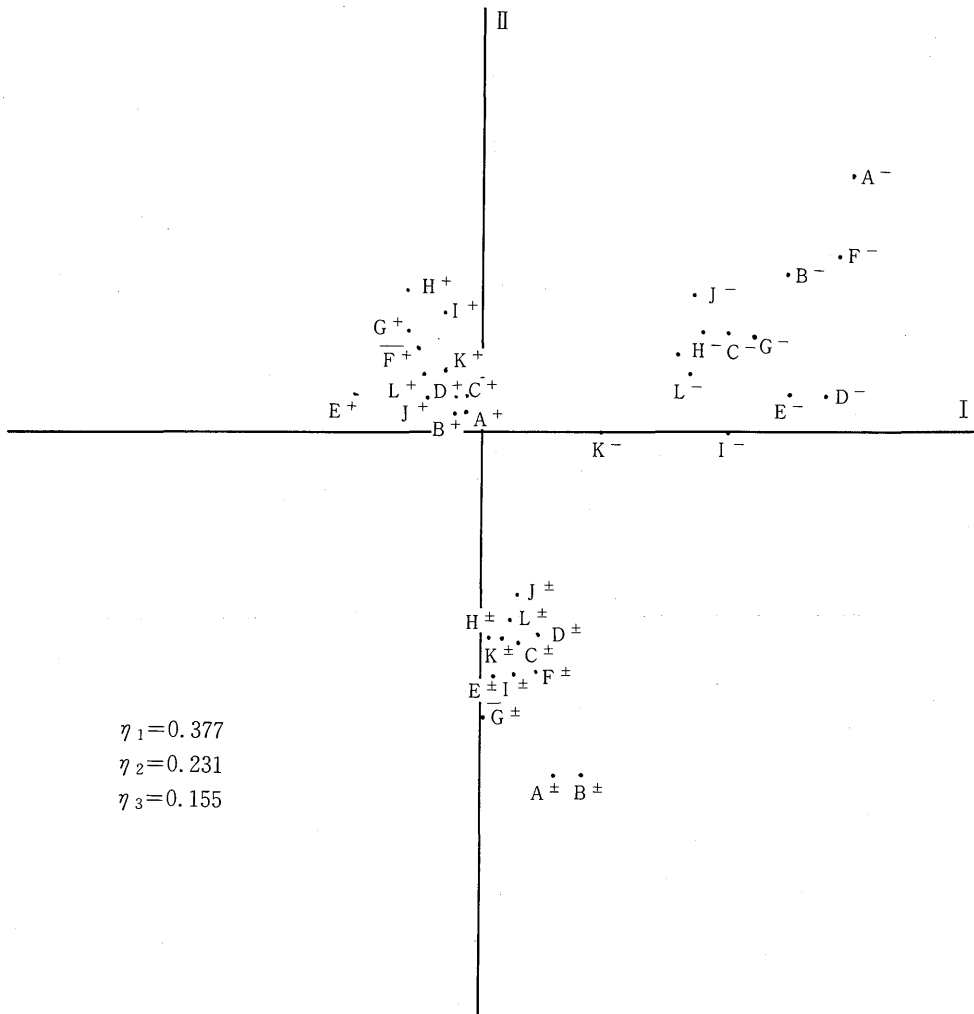
それに対して、一般の男女大学生にはこの回答に少なからずの変動誤差が考えられ、回答の信頼

Fig. 4 Two dimensional configuration of items regarding Axes I and II of Quantification III  
(Medical Students)



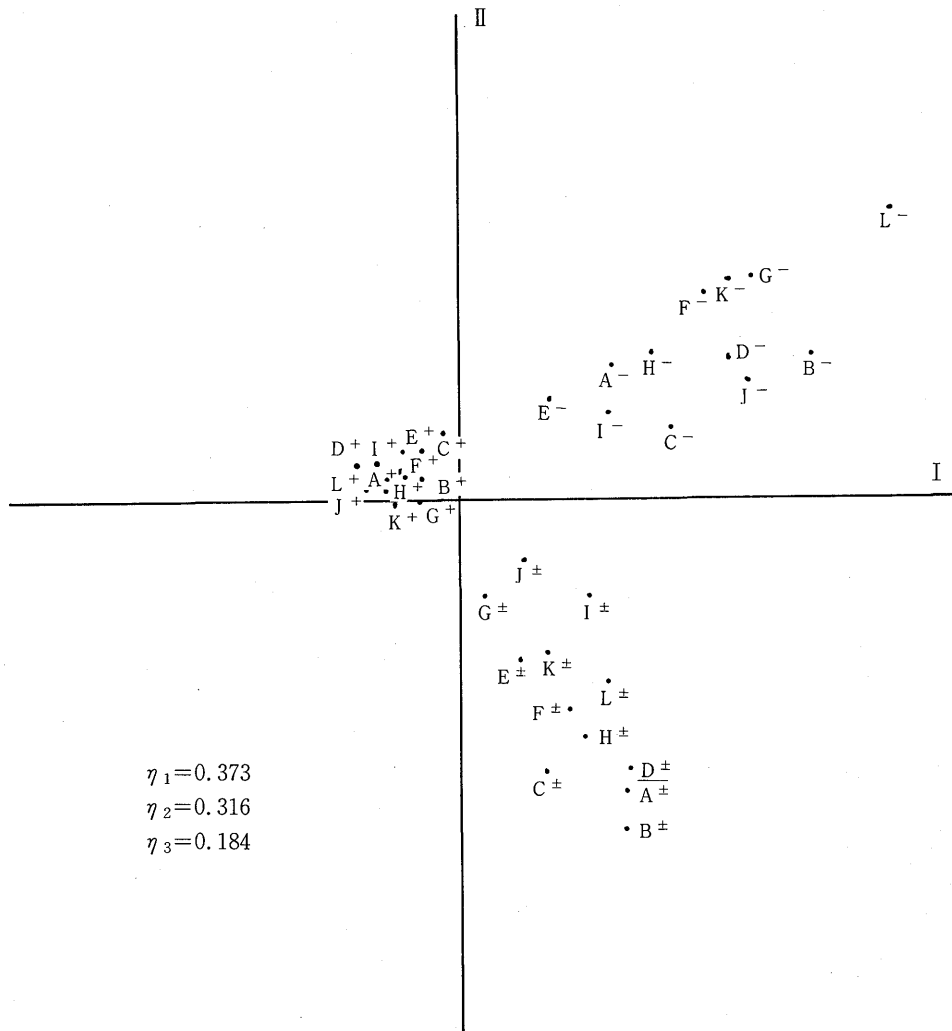
性が低いものと推定される。Fig. 1 と Fig. 2 においてことに変動の可能性が考えられる社会不安項目は健康・医療制度問題，家庭内暴力について男子大学生の回答率，および国家の財政赤字の増大と青少年の非行についての女子大学生の回答傾向である。これらの回答構造の様相を検討してみ

Fig. 5 Two dimensional configuration of items regarding Axes I and II of Quantification III  
(Buddhist students)



ると中間回答におちる回答に浮動性がうかがえる。中間回答の度合は神学生において圧倒的に少なく、ある意味において彼等の回答傾向は日本人の青年の回答パターンとは若干、趣を異にしているように思われる。その問題についての不安意識に黒白がはっきりとついているのである。又、神学

Fig. 6 Two dimensional configuration of items regarding Axes I and II of Quantification III  
(Theology students)



生は日本人の青年の感ずる一般的傾向とは一線を引いている。因みに、この種の社会不安意識を調べた研究結果によれば、アメリカ人大学生の回答傾向と少し似た傾向を有している。(丸山, 1985) つまり、大雑把に言えば神学生の意識はアメリカ人の大学生の意識と同じであるということがいえるのではないと思われる。



### 総合考察—青年における不安の問題

既に述べたように、現代社会は文明の成熟期にある。前途に生成発展や飛躍が感じられなく、活力の喪失、老いをしか予期することが出来ないとすれば、本質的に活力のシンボルであるはずの青年はおしなべて、暗い明日の死を意識しながら、今日の生を限りなくいとおしみ、なによりも自分の体や健康に気を使い、無理をしないで今日一日を健気に生きることだけに関心を持ち始める。しかし、それだけではすまされない内なるエネルギーの発揚が様々な新興宗教活動—恍惚の中で踊り、歌い、楽器をうちならす、靈動、異言、異星人などを特色とした宗教団体での諸活動—にのめり込ませる場合もある。再生願望だけで、短絡的に死に急ぐこともある。戯れの快楽指向だけで残酷な殺人を行うこともある。青年が切に望む原初的なエネルギーの発散は自分の生命が躍動し、燃焼することで全うされるのだが、それが抑えられている現状であれば、漠然とした不安感だけが増大する。この現実こそ、Frued のいう神経症的不安である。Frued は主体性をもって真の自己に目覚める信号としての人間的不安を抑圧し、自分の孤独な死を否定し、いつまでも父母の保護下で平安に過していたいと願っても、それを果たすのは不可能であることを知って神経症的不安に陥入るという。この種の不安は急激に生ずるのではなく、自分の内面的感情が空虚で迫力なく、人生に無気力・無感動でどんな驚ろきも感じられない、未来が不安定でどんな保証もなく、よりどころのない現実の存在である自分への漠然とした不安感として生起する。

社会的現状が前途に発展なく、一貫性なく、見通しもきかぬとなれば、なおのこと、個人の内面は空虚を増し、人生からの遊離を助成する。かくして、青年は反動的に刺激を求め、衝動的に行動し、自分の人間的感情を覚醒させようとする。彼等に欠けているのは、将来に対する真の意味での危機感、不安感である。「不安はめまいにたとえることが出来る。大きく口をひらいた深淵をその目でのぞきこんだ人はめまいをおぼえる。だが、その原因は何かといえば、それは深淵であると同様に彼の目でもある。……、このようにして不安は自由のめまいである。」と Kierkegaard は主張する。ある日、暗い深淵（死、無）をのぞきみた自己（Self）は確実に訪れるおのれの孤独な死を自覚し、眩暈を覚える。このめまいを起すのは精神の統合をめざし、本来的な真の自己に目ざめる時で、それは不安を媒介として起り、自覚的に自由な人間へと成長する過程において生ずるのである。不安を通して自覚される有限な存在としての人間的な無力感は青年期特有の明日への活力源である。不安不在と自己喪失は不可分につながっている。様々の意味での現実喪失や不安の不在を解決するために自己破壊的衝動を起す青年が多発している。現在、社会をさわがせている様々の青少年の爆発的で残虐な行動の多くは歪曲されたかたちでの自分自身に目ざめようとする盲目的で虚しいあがきであるともいえる。不安が自覚される過程で陥入る絶体の孤独を支えるのは、人と人との間の人間的共感であり、精神的なつながりであることを十分によく知っておく必要がある。たとえい

かなる社会的混乱の時でも、未来に対する確固たる精神的自由を発動する自己の主体性が存在する限り、それを擁護する他者の存在がある限り、現実的不安一人間に自己の存在を実感させる実存的不安の中で、人は神経症的にそれにのみこまれ、自由を失って幼児的不安（神経症的不安）におし流されることはないからである。

## おわりに

現在、社会問題として浮上している諸問題についての不安意識の強さは神学生において最も強く、つづいて女性集団（一般女子大学生、看護学生）のそれである。不安によって人間は人間の存在を実存的に感得するのであれば、不安の存在は自己意識の強さと不可分に結びついており、様々の問題解決にみずからすすんで身を投げ出し、その突破口を開こうとする積極的な姿勢を暗示しているのだといえる。不安の原型ははじめて母体から分離する時の出生体験にはじまり、人間の根本的不安はこの世に誕生した時から、死にいたるまで際限もなく続いているといわれる。因みに出生時の産声は、人間がはじめて味わう不安と恐怖の叫びであるともいわれている。不安感が少なく、楽天的に生活を楽しんでいる人にとっても、出生時にまつわる根本的不安は体験されているのであり、不安と痛みとは人間の生活に切り離して考えることは出来ない。つきつめてその事態を考えるか否かによって不安の強弱が決まるだけである。この事実は宗教的態度の様相にも反映している。生の基底に漠とした不安が生ずるその度合は、宗教的ヌミノース体験、回心、宗教意識の深さと同質のものであるように思われる。人生の苦悩や多くの矛盾を抱え乍ら、不動の真理、絶対者の実在の実感を得る時、失われていた自分自身を回復し、生きることの意味を発見してゆく過程は不安の高まりに正比例し、宗教行動を活性化させる要素ともなりうる。このようにして、神学生や宗教的共感性の高い女性集団に不安感の高い事実が肯定出来るであろう。

しかし、現代社会の青少年の生活態度をみればそこに幼児的不安、神経症的不安の多く発生する土壌のあることに気付いて愕然とするのである。現代の健康な子供の特色のひとつに「ネアカぶりっ子」という現象がある。それは性格が明るく、物事をくよくよ考えず、日常生活を楽しく過すふりをしなければ人々と共存出来ないという状況である。人生の深い悩みも生きていることの意味もあえて自分の目からそらし、悲しみの場面ではそれをギャグ化し、茶化すしか方法を知らず、本も遠ざけ、仲間と他愛のない身辺のことだけに異常なほどの熱意を示す一種の退行症候群（幼児がえり）を思わせる子供が増加している。そうしなければ、いじめられ、所属集団から除名されるのである。彼等の生活の知恵は仲間外れにされないために、あえて「ネアカ」を装うしか方法はなく、たとえ、内面に芽生える精神的苦痛があっても、それと決して正面から取り組まずに無視することである。しかし、子供の自我の目ざめは早晚やってきて、この子供の心の分裂をひきおこし、神経症不安を招来し、青年期になってから、彼等をアイデンティティ拡散の方向へとおいやることは必

須である。そこにおける不安と痛みの克服をどのように行うか、この問題こそ、現代社会が抱えなければならないひとつの大きな社会問題であることを十分知っておくことは重要である。

#### 参考文献

- (1) Bataille, G., *The'orie De La Religion*, Paris : Gallimand 1974 (バタイユ, G. 湯浅博雄訳『宗教の理論』東京：人文書院, 1985)
- (2) Brown, L.B., *The Psychology of Religious Belief*, Florida : Academic Press. 1987
- (3) Brown, N.B., *Life against Death : The Psycho-Analytical Meaning of History*, London : Curtis Brown Ltd., 1959 (ブラウン, N.O. 秋山さと子訳『エロスとタナトス』東京：竹内書店新社, 1970)
- (4) Dourley, J.P., C.G. Jung and Paul Tillich-*The Psyche as Sacrament*, Toronto : Inner City Books, 1981 (ドウアリィ, J.P. 久保田圭伍, 河東仁訳, 『ユングとティリッヒ』東京：大明堂, 1985)
- (5) フロイト, S. 小此木啓吾訳『快樂原則の彼岸』フロイト著作集第六巻, 150～173, 東京：人文書院, 1970
- (6) フロイト, S. 小此木啓吾訳『集団心理学と自我の分析』フロイト著作集第六巻, 219～231, 東京：人文書院, 1970
- (7) フロイト, S. 浜川祥枝訳『文化への不満』フロイト著作集第三巻, 477～487, 東京：人文書院, 1969
- (8) Hayashi, C., *Theory and Examples of Quantification (II)*, *Proceedings of the Institute of Statistical Mathematics*, 4, 19～30, 1956
- (9) James, W., *The Varieties of Religious Experience*, New York : Macmillan, 1901 (ジェイムス, W. 榊田啓三郎訳『宗教的経験の諸相』上, 下 (岩波文庫), 東京：岩波書店, 1968)
- (10) 木村尚三郎, 『文明の成熟, そして死の問題』東京大学教養講座10, 生と死Ⅱ (木村尚三郎編), 3～18, 東京：東京大学出版会, 1984
- (11) 岸田 秀, 『ものぐさ精神分析』中公文庫, 東京：中央公論社, 1982
- (12) Kierkegaard, S., *Begriff der Angst*, 1844 (キルケゴール, S. 小川圭治訳『不安の概念』東京：講談社, 1979)
- (13) Küng, H., *Exisitiert Gott? Antwort auf die Gottesfrage der Neuzeit*, München, 1978 (キュング, H. 鈴木晶訳, 『フロイトと神』東京：教文館, 1987)
- (14) Maruyama, K., Hayashi, F., & Kamisasa, H., *A Multivariate Analysis of Japanese Attitude toward Life and Death*, *Behaviormetrika*, No.10, 35～48, 1981
- (15) 丸山久美子, 個人主義の倫理, 盛岡大学紀要, 4, 65～72, 1984 a
- (16) 丸山久美子, 団塊の世代の社会不安意識, マーケティングのための心理学研究 (II), 41～49, 1984 b
- (17) 丸山久美子, 米国大学生の死生観の構造, 盛岡大学紀要, 5, 61～77, 1985
- (18) 丸山久美子, 林 文, 青年の死生観に関する比較研究 (一), 盛岡大学紀要, 6, 15～24, 1986
- (19) 丸山久美子, 高齢化社会の生き方に関する課題—生と死のエトス—, 生命保険経営, 56, 69～86, 1988 a
- (20) 丸山久美子, 生と死のエトス—現代青年の社会不安と死生観—, 聖学院大学論叢, 1, 163～179, 1988 b
- (21) 丸山久美子, 松崎くみ子, 現代青年の宗教的態度と生命倫理に関する心理学的研究, 青山学院大学教育研究, 33, 163～186, 1989
- (22) Maslow, A., *Religions, Values, and Peak Experiences*, New York : Viking, 1964
- (23) 室生 忠, 『新人類と宗教』東京：三一書房, 1986
- (24) 小此木啓吾, 現代精神分析 1. 東京：誠信書房, 1971
- (25) Spilka, B., Hood, R., & Gorsuch, R., *The Psychology of Religion*, Prentice-Hall : Englewood

現代青年の社会不安意識と宗教的態度に関する構造分析

Cliffs, N. J. 1985

(26) Spinks, G.T., Psychology and Religion-An Introduction to Contemporary Views-, London : Methuen & CO. LTD, 1963 (スピングス, G.T. 久保田圭伍訳, 『人間心理と宗教』, 東京: 大明堂, 1970)

(27) Vitz, P. C., Sigmund Freud's Christian Unconscious, New York : The Guilford Press, 1988